

事後評価シート

調査研究課題名	地域に根ざした社会資本整備のあり方に関する研究
担当者	日下部主任研究官(長野前主任研究官) 高森
当初目標と目標達成度	<p>本研究の目標は、整備当初の想定どおり(もしくはそれ以上)の長期間にわたって社会資本としての本来的な機能を発揮しつつけており、かつ地域のシンボル等として地域の風土形成に寄与している社会資本に着目し、それらの社会資本の整備等が可能となった背景や過程について整理することで、今後、「地域に根ざした社会資本」の整備を検討する際の一助となることである。本研究において、帝都復興計画による「隅田川橋梁」や第一次大阪都市計画事業による「大江橋・淀屋橋」という東京・大阪を代表する社会資本について、整備当時の背景や関係者による意志決定過程等について整理・考察を行っており、目標を概ね達成することが出来た。</p>
調査研究内容の妥当性	<p>成熟社会となり価値観が多様化した現代において、社会資本整備も、そのあり方について経済社会の変化への対応が必要であり、特に戦後を中心として進められてきた、経済的効率性の最重要視ではない整備のあり方を検討することが必要とされている。本研究は、単なる経済効率性だけではない社会資本整備事例について詳細に調査しており、今後の社会資本の整備のあり方を検討するうえで、有益な視点・知見を提供していると考えられる。</p>
調査研究の仕組みの妥当性	<p>研究の方針を検討するうえで、橋梁部門をはじめとする土木史分野における有識者である小林一郎熊本大学教授らに示唆・指導を頂いた。また、具体の事例調査にあたっては、隅田川橋梁を重要な対象として研究を進めている中井祐東京大学助教授や、大阪の橋梁群の第一人者である松村博(財)阪神高速道路管理技術センター理事らから、適宜情報提供・示唆を頂きながら進めており、適切に整理することが出来た。</p>
成果と活用(予定)	<p>本研究において、地域に根ざした社会資本整備に当たっては「総合的な視点からの位置づけの高さ」や「当事者の理念・意志決定の明確化」が重要であることを整理した上で、さらに今後は、「社会資本の機能の捉え方に関する再検討」が有効であることを指摘した。国・地方公共団体に限らず、土木分野一般において社会資本整備に携わる担当者が、今後の社会資本整備のあり方を検討する際に、参考となる基礎資料として活用されることが期待される。</p>

その他	
意見	